

バンコクの社会史

―― 20世紀前半期における都市衛生――

平成20年入学

参加したフィールドスクール：改革フィールドスクール

調査地 （調査国）：バンコク、タイ
ネパール

Nipaporn Ratchatattanakul

キーワード：バンコク、社会史、都市衛生、多民族社会、タイ

自分の研究テーマについて

本研究は、19世紀末期から20世紀半ばにかけて、バンコク市内で発生した都市衛生問題に着目し、中央政府および自治体の行政・政策と、市民自身による諸活動の双方から検討することにより、バンコクという都市社会の特徴を歴史的に明らかにすることを目的とする。18世紀末に王都として設立されたバンコクは東洋のベニスとも形容される都市であったが、19世紀半ば以降、特に華南から大量の移民が流入してきたため、人口の増加とともに、伝染病やゴミ、下水など衛生に関する問題が深刻化した。こうした問題に対して、新来の移民も含む住民はどのように対応してきたのであろうか。とりわけ自治的な組織や住民団体をいかなる形で組織してきたのか、そして「バンコク市民」という意識はいつ頃、どのように形成されてきたのかという点に注目しながら、その社会のありようを検討したい。これはまさに人々の「生存基盤」を明らかにすることであり、今日における諸問題の歴史的根拠を理解し、今後を考える上でも重要であると思われる。

バンコクの歴史に関する研究の多くは、土地利用や都市の拡大など経済発展の側面にのみ着目して論じており、社会史に焦点を当てた研究はほとんどない。また都市環境に関する課題を検討する場合でも、王室が行う近代化という枠組みの中で説明される傾向が強く、住民の生活の実態や住民の活動は看過されてきた。こうした既存の研究の問題を踏まえ、本研究は、市民の役割に焦点を当てながら、現地語一次資料に基づいてバンコク社会の歴史を明らかにしようとする。またバンコクは、タイ人、西洋人のみならず、中国人、インド人、など多くのエスニックグループが居住する多民族社会であり、民族間関係を無視しては住民の生活のありようも理解できない。これは東南アジアの他の植民地都市と共通する特徴ともいえるが、他方タイ社会は独立国であるが故の特徴ももっており、両方の側面からアプローチする。

フィールドスクールから得られた知見について

バンコクは、16世紀以来、インドやヨーロッパ、中国、琉球などとの貿易が盛んになるにつれて開発が進み、18世紀後半にチャクリー王家によって王都として建設された後、チャオプラヤー川下流域における政治・経済の中心的都市となった。また19世紀に入ると、特に中国との貿易が発展するとともに、中国からの労働者の移住が増加した。このように19世紀後半、急激に大量の移民がバンコクに流入したため、都市の領域は拡大するようになった。都市を拡大するため、バンコクの為政者は公衆道路を建てたり、運河を作ったりした。一方、市民は公衆道路と繋がる小路やチャオプラヤー河と繋がる運河を作った。それで、20世紀前半のバンコクの特徴は都市計画がないと考えられていた。しかしながら、バンコク都市史の研究の多くは、王都として建設されたバンコクが17世紀の伝統的な都市概念に基づいて建築されたと結論している。伝統的な都市概念に基づいて建築されたということは、ヒンズー教、仏教、伝統的な都市防衛策を基礎にして作成された、ということを示しているしかし、ネパールの首都のカトマンズ、ラリトプル、バクタプルと比較した場合、バンコクには伝統的な都市概念の建築はあまり見られないとの印象を受けた。カトマンズ、ラリトプル、バクタプルのドルバール広場や交差点上のヒンドゥー教の寺院を観察し、これらの三都市は宗教の影響を受けて拡大されたのではないかと考えた。これらの例を参考に、バンコクが伝統的な都市概念に基づいて建築された、という結論を再考したいと思う。

フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？

本研究はバンコクにある国立図書館と国立文書館に所蔵されている首都省や外務省、内務省などの政府資料や新聞、雑誌などの一次資料を中心に調査している。19世紀末期当時の訴状等の資料によって、衛生管理地域以外に居住する人々にとっては、衛生問題の処理は集落の役割であり、政府の担当ではないと考えられていたことが伺える。さらに、衛生問題を処理する集落は、中国人やケーク(ヒンズー教の人またイスラム教の人)などの移民である。

また、1920年代当時の新聞や雑誌の記述によれば、衛生問題によって「サタラナ・公共」の課題の認識が形成されたと言える。市民は新聞を通して、政府の衛生問題に関する政策と王庫局と投資者に利益が集中することを批判した。逆に、伝染病、性病、ハンセン病や鉤虫症の発生、流行に関する新聞記事によって、「都市知識者」は、社会的に地位の低い人々が汚れ・病気の原因だと考えるようになった。このような見方は、政府の支配者と共通している点だといえる。

一方、首都のカトマンズ、ラリトプル、バクタプルといった、各都市で得た経験によって、この三つの都市衛生は、それぞれの特徴を持っていることが分った。例えば、バクタプル市の環境衛生は、首都であるカトマンズ市より水準が高いと考えられる。その理由としては、バクタプルにある文化遺産を保存するため、ドイツ政府が衛生システムの水準を向上するための支援金を寄付したことがあげられる。このことから、ネパールの首都とその近郊都市の場合は、衛生問題に関する外国政府の役割がバンコクより大きかった可能性があるのではないかと考えた。

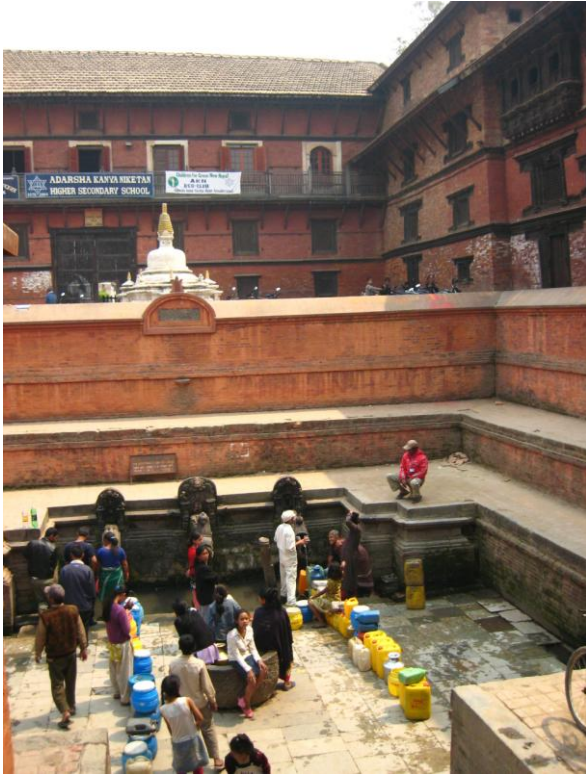


図1 ラトリプル住民の井戸からの水汲み風景



図2 カトマンズの商店街の風景



図3 都市衛生の向上が見られるバクタプルの商店街